

アリストテレスの貨幣起源説

古 川 顕

要旨

貨幣の起源は、通常、自然発生的な貨幣起源説（貨幣自生説）と人為的な貨幣起源説に大別することができる。後者の範疇に属する貨幣起源説、すなわち貨幣は、社会や国家と諸個人間あるいは人々相互の間の一定の合意や契約、法律や慣習などによって生成したとみなす考え方であり、これらをまとめて社会契約説と呼ぶことができる。アリストテレスは、貨幣が共同体を構成する人々の「申し合わせ」、あるいは社会的合意によって人為的に創造されたとみなすことから、彼の貨幣起源説は社会契約説の一つであると考えられる。ただし、アリストテレスが活躍した古代ギリシャ社会に典型的に見られる経済活動は、市場制度を基盤とする競争的なものではなく、共同体内の人々の相互扶助原理に基づく互酬的活動であると想定されている。彼の社会契約説は、プーフェンドルフ、ハチソン、アダム・スミスなどによって踏襲され、現代においても大きな影響力をもっている。

キーワード：社会契約説、古代ギリシャと互酬性、プーフェンドルフ、ハチソン、スミス

目次

はじめに

I 貨幣の社会契約説

II アリストテレスの貨幣起源説

III アリストテレスの系譜

IV アリストテレス貨幣論への再評価

おわりに

は じ め に

貨幣の起源を明らかにすることは難しい。経済学、社会学、歴史学、人類学などいくつもの観点から、さまざまな考え方が提起され、現時点においても混迷をきわめているといっても決して過言ではない。貨幣の起源について最も一般的なのは、次のような考え方である。それは、何らかの財と他の財を直接に交換し、そのために財の種類および分量を相互に等しくする交換の相手を見出すことは、時間的・場所的に困難である。この困難を克服するため、社会の一部、例えば商人間において貨幣による間接交換が発生する。ついで、この間接交換のもつ利益が認められるにつれて、貨幣の使用が他の社会にも模倣され、次第に一般的となるという説明である。これは、貨幣の起源についての論理的説明にとしては説得的ではあるけれども、これに対する反論、異論はのちに議論するように必ずしも少なくない。本稿では、社会契約説および貨幣起源説の嚆矢をなすと思われるアリストテレスの考え方を中心に、アリストテレス後のプーフェンドルフやハチソンおよびアダム・スミスの社会契約説および貨幣起源説について多面的に考察する。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第Ⅰ節では、社会契約説とは何かを明らかにすることが貨幣起源説と密接に結びついていることから、その内容を明らかにする。第Ⅱ節では、代表的な貨幣生成の理論として、アリストテレスの社会契約説と彼の貨幣生成の理論を取り上げ、かなり詳細に検討する。この節では従来、少なくとも経済学の分野では、ほとんど無視されてきた、あるいは分析の対象ともなり得なかった古代ギリシャにおける交換の意義についても考察する。アリストテレスの社会契約説を分析の俎上に載せる場合、この点を明確にすることが不可欠の前提と思われるからである。第Ⅲ節では、アリストテレスの社会契約説を踏襲する「国際法の父」と呼ばれるプーフェンドルフと、その後のハチソンやスミスの社会契約説および貨幣起

源説について検討する。最後に「おわりに」では、これまでの検討結果を簡単に要約するとともに、問題点や今後の課題についても言及することにした。

I 貨幣の社会契約説

貨幣の起源については、経済学、社会学、歴史学、考古学、人類学などいくつもの観点から、さまざまな考え方が提起され、現時点においても混迷をきわめていると言っても決して過言ではない。本節はそのタイトルが示すように、貨幣の起源がさまざまな社会契約（social contract）に由来するという考え方を論じようとするものである。しかしながら、肝心の社会契約とは何か、そしてその社会契約に関する学説（社会契約説）が、具体的にどのような時代を背景に誰によって説かれ、さらにそれらの契約説の力点は何であったのかを明らかにすることは存外むずかしい。通常、社会契約説（social contract theory）とは、国家および法の成立根拠または存在根拠を、国民である個人相互の間に締結される契約、あるいは人々の合意のうちに求める考え方を指している。

本来、社会契約説というのは、17～18世紀の市民革命期に、絶対王政のイデオロギーであった「王権神授説」の対抗概念として、自由で平等な諸個人が政治や国家の主体であり、その諸個人中心の自由で平等な社会を確立するためには、王権に代表される時の権力や支配階級に対する恣意的・抑圧的な権力の制限を主張する。その場合、王あるいは支配階級という統治者の諸個人（被統治者）に対する契約的關係が重視され、統治者と非統治者との間の双務的契約が恣意的・抑圧的な支配に対する歯止めとして機能すると考えられたのである。よく知られたホブズ、ロック、ルソーなどの社会契約説は、さまざまな理論的差異はあるけれども、社会や国家は、統治者と被統治者との間の双務契約によって成立したとみなす点では共通していると言えよう。

そして統治者と被統治者との間の社会契約の具体的な手段として、「合意（同意）」、「申し合わせ」、「協約（協定）」、「慣習」、「法律」、「布告」などが導入されたと考えられる。こうした社会契約説の原型は、古代ギリシャのプラトンやアリストテレスなどによっても説かれているし、封建主義的社会関係によって支配されていた中世においても、王と臣下の間の主従関係は契約に基づいて形作られたとみられる。⁽¹⁾

ただし、本稿において貨幣の起源を社会契約説の観点から考察するとは言っても、従来の社会契約説の理論的な分析、あるいは歴史的経緯を踏まえて厳格に考察するというよりは、「社会契約」をもっと広い意味に捉え、貨幣の起源に関する考え方を、「自然発生的な貨幣起源説（貨幣自生説）」と「人為的な貨幣起源説」に二分したうえで、後者の範疇に属する見解をひとまとめにして「社会契約説」とみなすことにする。すなわち、人々が物々交換の不便を克服するために考案した貨幣は、自然発生的に生じた貨幣の範疇に属し、これとは対照的に、社会や国家と諸個人間あるいは人々相互の間の一定の合意や協約、法律や慣習、布告などによって生成した貨幣は、人為的起源に基づく貨幣に属するとみなすのである。本稿が対象とするのはこの後者に属する貨幣起源説であり、古代ギリシャのアリストテレスの貨幣起源説をはじめ、17世紀のプーフENDORFや18世紀のハチスンおよびアダム・スミスの貨幣起源説、20世紀初頭のクナップによって提唱された貨幣法制説（貨幣国定説）がその代表的なものである。このうち、クナップの貨幣法制説とは、彼の代表的な著書『貨幣国定説』において、「貨幣は法制的創造物である。貨幣は歴史の経過において非常に多種多様な形態で現れている。それゆえ、貨幣の理論はただ法制史的に把握しなければならない」（Knapp [1922] 邦訳1ページ）と主張し、貨幣は法制的産物であるとする立場から、従来の中心的な見

(1) 社会契約説については飯坂良明・田中 浩・藤原保信編著 [1977] 第1章と第7章を、また社会契約説の推移については Gough [1957] 第7章を参照されたい。

解である貨幣の価値単位を金銀などの金属量に求める「金属主義」（あるいは「商品貨幣説」）を徹底的に批判し、価値単位を国家による歴史的な法制の創造物とみなす「名目主義」の立場を鮮明に打ち出すのである。

貨幣の起源について最も一般的なのは、次のような考え方である。それは、何らかの財と他の財を直接に交換し、そのために財の種類および分量を相互に等しくする交換の相手を見出すことは、時間的・場所的に困難である。この困難を克服するため、社会の一部、例えば商人間において貨幣を媒介とする間接交換が発生する。この間接交換のもつ利益が認められるにつれて、貨幣の使用が他の社会にも模倣され、次第に一般的となると考えられる。こうした見解は、貨幣の起源についての論理的説明にとしては説得的ではあるけれども、これに対する反論・異論はのちに議論するように必ずしも少なくない。

18世紀の市民革命期に、絶対王政のイデオロギーであった「王権神授説」の対抗概念として、自由で平等な諸個人こそが政治や国家の主体であり、その諸個人中心の自由で平等な社会を確立するためには、王権に代表される時の権力や支配階級に対する恣意的・抑圧的な権力の制限が必要であると主張する。その場合、王あるいは支配階級という統治者の諸個人（被統治者）に対する契約的關係が重視され、統治者と非統治者との間の双務的契約が恣意的・抑圧的な支配に対する歯止めとして機能すると考えられたのである。先に触れたホッブズ、ロック、ルソーなどの社会契約説は、さまざまな理論的差異はあるものの、社会や国家は、統治者と被統治者との間の双務契約によって成立したとみなす点では共通している。こうした統治者と被統治者との間の社会契約の具体的な手段として、「合意」、「申し合わせ」、「協約」、「慣習」、「法律」、「布告」などが導入されたと想定される。社会契約説は、17～18世紀にホッブズ、ロック、ルソーなどによって主張されたものではあるが、その原型は古代ギリシャのプラトンやアリストテレスなどによっても説かれて

いる。また、封建主義的社会関係によって支配されていた中世においても、王と臣下の間の主従関係は契約に基づいて形作られたとみられる。

貨幣を合意や法律の産物とみなす社会契約説ないし協約説（conventional theory）の系譜について、メンガーは次のように述べている。「科学がここで解決すべき問題は、その動機〔一国のすべての経済主体が、ふつう直接にはほとんど使用できない状態の小さな金属片と自分の商品を交換することを熱望するということ——引用者〕が明白ではないある一般的な人々の行為を説明することにある。そのため、この行為を人々の合意（Uebereinkunft）、または彼らの総意の表現としての法律に基づかせようとする考え方が、特に貨幣の鑄貨形態を念頭に置くとき、ともすれば生じやすいのである。プラトンとアリストテレスはこの見解に従っている。前者は貨幣を『交換のために約束された表章』と呼び、後者はしばしば引用される箇所（『ニコマコス倫理学』Vol. 8）で、貨幣は合意によって発生したものであり、自然によるものではなく法によるものである」（Menger [1871] 邦訳224ページ）と述べている。メンガーは、直接的な交換取引による交易の困難を貨幣の導入によって取り除く可能性について言及し、貴金属がこの目的にとって特に適していると指摘し、アリストテレスの名を挙げて人々の合意によって金・銀などの貴金属が貨幣となるという結論を導く。こうしてメンガーは社会契約説（ないし協約起源説）の系譜について説明したうえ、貨幣起源説の展開が、自生説（自然発生説）から合意や法による人為的起源説としての社会契約説への発展という形で把握するのである。

以上のように、メンガーは、貨幣は自然発生的に成立したのではなく、人々の合意ないしは法律によって成立したと主張するのであるが、その一方で、次のようにも指摘している。「18世紀前半の財政・金融に関する作家たちの中では、ローがその貨幣の起源についての研究で卓越している。……それに対してローは、〔貨幣の〕協約起源説の決定的な点を攻撃し、他の諸商品

アリストテレスの貨幣起源説

と比べての貴金属の特有の位置を認識しているが、これは以前の誰にもなかったことである。彼は貴金属の貨幣としての性格を、貴金属自体の特性から発生的に展開していることを試み、かくして貨幣の起源についての正しい理論の礎石を据えた人となった」(Menger [1923] 邦訳491ページ)。すなわち、「ローは断乎として合意説 (Conventionstheorie) を斥け、残余の商品中における貴金属の特異な地位を認識し、その貨幣としての性格をこの特異性から諸関係に自然的に生まれ出たのであり、この際、国家の影響力は少しも必要ではない」(Menger [1871] 邦訳224-225ページ) のである。メンガーは貨幣の起源に関する見解を、合意や法律あるいは協定の産物とみなすアリストテレスを嚆矢とする貨幣の社会契約説 (ないし協約起源説) から、ローに代表される貨幣の「自然発生説」⁽²⁾ への発展という形で把握するのである。

II アリストテレスの貨幣起源説

貨幣がどのような役割を果たすのか、貨幣が何からできているのか、貨幣がどのようにして出現したのかという問題、すなわち貨幣の機能と貨幣の素材、貨幣の起源にかかわる問題は密接に関連し、これらは三位一体化していると言ってもよいだろう。こうした問題について体系的に整理することは容易ではないが、以下では貨幣の起源説に関して先ず古代ギリシャの哲学者プラトンとアリストテレスの理論を取り上げる。

プラトン (Plato, 紀元前427-347) は、その著作『国家 (上)』(*Republic*) において次のような会話を紹介している。「国そのものの内においては、市民たちはそれぞれの仕事の生産物を、どのようにしてお互いに分け合うのだろうか？まさにそのためにこそ、われわれは共同体を作って国家を建設したのだがね」。それに答えて相手は言う。「われわれはく仕事の生産物を売った

(2) メンガーについては古川 [2017] も参照されたい。

り買ったりする〉市場をもち、また交換のためのしるし (a symbol for the sake of exchange) としての、貨幣をもつことになるだろう」(邦訳152ページ、傍点は引用者)。この会話から推測されるように、プラトンにとっては、貨幣は“交換のためのシンボル”であるということになる。一方、『法律(上)』(Laws)においては、貨幣は“財の非均質性と非可測性を均質性と尺度に還元する手段”(邦訳335ページ)という。すなわち、貨幣とは交換の手段であり、価値尺度であるというのである。彼はまた同書において、「何びとも、個人的には金銀をいっさい所有することは許されないが、日常の交換のための貨幣は許される。このような交換を、〈市民が〉職人たちや〈市民にとって〉必要とする限りのそういう交換のために、貨幣の所有は許されているのである。つまり奴隷や外国人などの賃金労働者に、賃金としてそれを支払うために、これらの理由で、国内では通用するが、他国人たちには無価値な貨幣を持つべきだと、われわれは主張する。全ギリシャ共通の貨幣は、他国の人々のもとへ赴くこと、例えば、外交使節とか、その他の国にとって必要やむを得ない使節として、誰かを派遣する必要が生じた時など、そういう時のために、国家は常のギリシャ共通の貨幣を保有していなければならない。しかし個人が外国に旅行する必要が生じた場合には、役人の許可を得て出かけるべきだし、外国の貨幣を余して、どこかから国へ持ち帰ったならば、それを国家に預けて、その金額に見合う国内の貨幣を受けとらねばならない」(邦訳311-312ページ)。つまり、貨幣(金銀)は原則として個人の所有は認められないけれども、必要とする日常の交換のための貨幣の使用は国内〈ポリス内〉に限って使用は認められるというのである。プラトンはここでも交換手段としての貨幣の使用を認めている。

プラトンに比べると、アリストテレス(Aristotelēs, 紀元前384-322)の貢献ははるかに大きい。上述のように、プラトンは貨幣の機能について断片的に触れてはいるものの、貨幣の起源に関してはまったく言及していない。

アリストテレスの貨幣起源説

これに対して、アリストテレスは、貨幣の機能や起源について現代の貨幣論にも影響を及ぼす大きな業績を残している。

よく知られているように、アリストテレスはプラトンの弟子であり、ソクラテス、プラトンと並ぶ古代ギリシャ最大の哲学者である。哲学、倫理学、政治学、芸術、物理学、生物学などほとんどあらゆる学問分野に業績を残している。「万学の祖」と称される由縁である。彼には膨大な著作があるが、その中で貨幣の分野においても、『ニコマコス倫理学』および『政治学』という2冊の書物で体系的に自説を展開している。その中でとくに注目すべきは、貨幣の起源説である。

アリストテレスは、『ニコマコス倫理学』において次のように述べている。少し長いが引用しておきたい。「交換の対象となる事物がすべて何らかの意味において比較しうるものでなければならない所以はそこ〔取引の実現——引用者〕にある。こうした目的のために貨幣は生まれてきたのであり、それがある意味における仲介者となる。貨幣は、あらゆるものを、したがって超過や不足を測るのである。それは、だから、何足の靴が一軒の家屋、あるいは一定量の食品に等しいかを測る。……そうでなければ、交換も共同関係もありえないだろう。しかし、このことは物品が何らかの仕方において均等なものでないならば不可能であろう。したがって……、あらゆるものがある一つのものによって測られなければならないのである。この一つのものとは、本当は、あらゆるものの場合を包摂する需要にほかならない。なぜなら、もし必要が少しも存在しないか、ないしは双方に同じような仕方では存在しないならば、交換は成立せず、あるいは現在のような仕方での交換は成立しえないだろう。だが、貨幣は需要の代わりに申し合わせに基づいて生まれたのである。それゆえ、それはノミスマ (nomisma) という呼称を有している。それは自然の本性に基づくのではなくて人為的であり、これを変更したり、無効なものにするのはわれわれの自由なのである」(邦訳(上) 243-244ページ、

傍点は引用者)。

これより、アリストテレスは貨幣について、少なくとも次の4つの点を重視していることが分かる。第1は、貨幣の機能として、あらゆるものを測る共通の尺度、すなわち「価値尺度」を考慮していることである。第2は、「もし必要が少しも存在しないか、または双方に同じような仕方では存在しないならば、交換は成立せず、あるいは現在のような仕方での交換は成立しない」と述べるように、モノとモノとの直接的な交換は困難であり、そうした直接交換が成立するためには、いわゆる「欲求の二重の一致」(double coincidence of wants)の成立することが不可欠の要件となることを主張するのである。紀元前4世紀に、すでにアリストテレスが物々交換の問題点を認識していたことは驚嘆に値する。第3は、アリストテレスが「需要」という言葉をおそらく誰よりも早く用いていることである。何でもないことのようにであるが、やはり驚嘆に値すると言わねばならない。⁽³⁾

第4は、こうした物々交換に伴う問題点を克服するために、貨幣はその共同体的社会を構成する人々の「申し合わせ」、あるいは社会的合意に基づいて交換の「仲立ち」(媒介物)として「人為的に」創造されたというのであ

(3) 市場における財の需要と供給の基本的な枠組みを用いて財の価格が決定されるという考え方は、イギリスの有名な哲学者ジョン・ロック(John Locke: 1632-1704)によって指摘されている。しかし、ロックは「需要」という術語を用いていない。財に対する需要と供給がその価格を決定するというミクロ経済学の最も基本的な命題を最初に提起したのは、スコットランド出身のジョン・ロー(John Law: 1671-1729)であるとされている。ローが「需要」という術語を経済分析のキー概念としてはじめて導入し、それを「数量」(供給)と結び付けることによって、価格の決定メカニズムを明らかにした最初の著作家となったと賞讃されている。またローはこの需給分析を用いて、すぐ後に触れる「価値のパラドックス」と呼ばれる命題を提示したとされている(以上については、古川[2015]第2節および第3節を参照されたい)。しかし引用した記述から明らかなように、ローよりはるかに先立って、アリストテレスはすでに紀元前4世紀に「需要」という概念を考え出し、それを用いて交換成立のメカニズムを暗示しているのである。まさに驚くべきことと言わねばならない。

る。

このことは、次の記述によっても裏書きされる。「貨幣はいわば尺度として、すべてを通約的にすることによって均等化する。事実、交換がなければ共同関係はないが、交換は均等性なしには成立せず、均等性は通約性なしには存在しない。もとより、このような著しい差異のあるいろいろのものが通約的となるということは実際は不可能であるが、需要ということへの関係から十分に可能となる。その際、何か単一なものが存在することが必要であって、これは協定に基づく。ノミスマという名称のある所以である」(同245-246ページ、傍点は引用者)。すなわち交換取引が実現するためには、取引当事者の間で交換される2つの商品の価値が等しいという意味での「均等性」が不可欠であり、その均等性は、価値尺度としての貨幣の働きによって「通約性」(共通性)を確保されてこそ保証されるという。そしてアリストテレスは、「欲求の二重の一致」を通じて交換される商品間の均等性と通約性が確保されるためには、「申し合わせ」、あるいは「協定」という共同体内の社会的合意に基づいて、貨幣という共通の尺度が生み出されることが不可欠であると主張するのである。

こうした『ニコマコス倫理学』におけるアリストテレスの考え方は、『政治学』においても踏襲される。彼は言う。「欠けているものの輸入と、余分に持っているものの輸出による相互扶助が、今までよりも国(ポリス)と国の間で行われるようになったとき、必然的に貨幣の使用が工夫されるようになった。というのは、自然によってもたらされる生活必需品はいずれも持ち運びに容易でないからである。ここから、それ自体が有用であり、取り扱いやすいという効用を持っているようなもの、例えば鉄とか銀とか、あるいは何か他にそれに類するものがあれば、そのようなものを交換のためにやり取りすることを相互の間で取り決めた。こうしたものの価値は初めのうちは単に大きさと重さによって測られたが、しかし遂には測る面倒を省くために、

刻印がその上に捺されるに至った」(邦訳. 24-25ページ, 傍点は引用者)。ここでは、『ニコマコス倫理学』におけると同様、交換当事者間の「相互の間の取り決め」によって交換取引が実現すると説くのである。「申し合わせ」、「協定」、あるいは「取り決め」と表現は異なるけれども、社会的な合意が貨幣の起源であることは『ニコマコス倫理学』の場合と変わらない。ただし厳密に言えば、『政治学』では、その社会的合意が国(ポリス)と国という共同体間の合意を問題にしているのに対し、『ニコマコス倫理学』では、共同体内の合意を念頭においていること、また『政治学』では、「持ち運びの便宜」とか素材自体の「有用性」(素材価値)に言及しているのに対し、『ニコマコス倫理学』ではそうした点に触れられていないことが異なっている。

アリストテレスは『大道徳学』(第1巻, 第33章)において次のように述べている。「大工は自分の製品を靴工の場合よりも多くの価値があるものとし、また一方、靴工にとっては大工を相手に製品を交換しなければならなかったが、靴の代わりに家を得ることはできなかったから、そこで今や人々は、このようなものすべてが買い求められる代償物、すなわち銀を通貨と名づけて、それを使用することを通習としたのであり、各人が各製品の価額を払うことによって相互の間に取引〈交易〉を行うとともに、これによって国家的共同を統合したのである」(邦訳55ページ, 傍点は訳者による)。こうしてアリストテレスは、貨幣生成の根拠を説明し、貨幣が国家(ポリス)統合を促すことを明らかにする。以上のようなアリストテレスの考え方は、①人々の間の交換を活発にするためには、財の価値を測る共通の物差し(価値尺度)が必要であり、価値尺度の存在によって、交換の対象となる事物が比較できるという目的のために貨幣は生成した、②物々交換(直接交換)が成立するためには、「欲求の二重の一致」が不可欠の要件となる、③貨幣は、共同体を構成する人々の「申し合わせ」(協定)によって人為的に創造された、④共同体を構成する人々が貨幣の使用を「通習」とすることによって国家統合

が促された、と要約できる。

以上、アリストテレスの貨幣起源説や貨幣機能説について説明したが、ソクラテス、プラトンやアリストテレスなどが活躍した古代ギリシャにおいて、改めて貨幣の概念や貨幣の役割について考察することは非常に大切である。というのは、当時の貨幣の概念なり役割を知るためには、古代ギリシャの社会・経済構造を理解することが不可欠の前提となると思われるからである。当然のことながら、アリストテレスにとって古代ギリシャの社会・経済構造は貨幣の概念や貨幣の機能を引き出す拠り所であった。彼の時代においては、貨幣が物々交換の不便を解消するために導入されたとの通説とは大きく異なっているという見方が有力である。物々交換の時代と定義される明確な歴史的な期間は存在しないし、時代を画することも容易ではない。物々交換に適合する経済システムは、確かな歴史的先例をもたず、単なる想像上の憶測的なモデルに過ぎない。このため、簡単ではあるけれども、いくつかの先学の研究に依拠しながら、古代ギリシャ史の一端を概観することにしたい。

ポラニー (Karl Polanyi: 1886-1964) は、市場制度とか市場における交換という最も基本的な経済構造や経済活動について次のように述べている。「われわれの時代より前には、原理的にさえ、市場に統制される経済が存在したことは一度もなかった。19世紀にあれほど執拗に唱和されたアカデミックな呪文にもかかわらず、交換で得られる利益や利潤が人間の経済に重要な役割を果たしたことはこれ以前には一度もなかった。新石器時代からこのかた、市場という制度はかなりありふれた存在ではあったが、その役割は経済生活にとって付随的なものにとどまっていた」(Polanyi [1957] 邦訳57-58ページ)。ここでポラニーのいう「19世紀にあれほど執拗に唱和されたアカデミックな呪文」というのは、アダム・スミスの『国富論』に描写された世界、すなわち社会的分業がある財・サービスと別の財・サービスとの間の交換を通じて市場の発展を促すという古典派のパラダイムにほかならない。ポラニー

は、「市場によって完全に支配・統制される経済などというものは、われわれの時代以前にはどこにも存在しなかった」(Ibid., 邦訳59ページ)と断じるのである。

またポラニーは、アリストテレスが活躍した古代ギリシャ社会について次のように指摘する。「アリストテレスがある一つの研究分野を構想するとすれば、制度的な起源と機能をもつすべての問題を社会の全体性に関連づけようとするであろう。共同体、自給自足性、公正が中心となる概念であった。現に動いている組織としての集団は共同体(コイノニア)を形成しており、その成員は善意(フィリア)の絆により結ばれている。家(オイコス)にも都市(ポリス)にも、それぞれのコイノニアに特有の、ある種のフィリアがあり、それを離れては集団は存続できないであろう。フィリアは互酬行動(behavior of reciprocity)、つまり互いに交代ですすんで負担を引き受けたり、共有したりすることによって表現される。共同体を存続させ、維持するのに必要なことは、その自給自足を含めて、それが何であれ、自然なことであり、本来的に正しいことである」(Polanyi [1971] 邦訳207ページ、傍点は原文ではイタリック)。

ポラニーはこの古代ギリシャ社会について、さらにこう続けている。「物々交換の起源に関しては、このゲマインシャフトの哲学者にとって、個人に固有のものとされているスミスの性向ほどつまらなく思えたものはなかった、と言うことがいえよう。アリストテレスによれば、交換とは、成員が共同の所有物を元来共同に使用していたような拡大家族の必要から生まれたものである。成員の数が増加し、別々に住まなければならなくなった時、以前は共同に使用していたもののいくつかが不足するようになり、そこで、必要なものをお互いの間で入手し合わなければならなくなったのである。これが結局、相互的分与(mutual sharing)というものになっていった。簡単に言えば、分与の互酬性は物々交換の行為を通じて実現し、そこから交換が生まれたの

である」(*Ibid.*, 邦訳219ページ, 傍点は引用者)⁽⁴⁾。こうして「アリストテレスが経済を発見する」(*Aristotelēs Discovers Economy*) というのである。

ポラニーは、古代ギリシャ・ローマ社会に典型的に見られる人間の経済活動の支配的な統合形態として、「互酬」、「再分配」および「交換」の3つを挙げている。「互酬」とは、相手からの贈与に対しては必ず返礼するという共同体的な慣習であり、「再分配」とは、集団内での財の配分にあって、それらが一手に集められ、慣習、法あるいは中央集権的な決定によって強制的に分配されるシステムである。「交換」とは、人々の間での財の相互移動であり、バーター、駆け引き、折衝という形態がある。このうち、「バーター」は、各人が最もよく利用するという仮定に基づいて財を交換する人々の行為である。駆け引きと折衝は、ここでは本質的となる。なぜなら各個人には、取引から可能な限りの利益を獲得していることを確実にする他のどんな方法も存在しないからである。折衝はこの場合、人間の短所の結果ではなく、市場メカニズムが論理的に要求する行動パターンなのである (Polanyi [1977] 邦訳99ページ)。また人間の経済における主要な「統合形態」として、ポラニーは「経済過程の諸要素、すなわち物的資源および労働から財の輸送、貯蔵、そして分配までを統合するような、制度化された移動」(*Ibid.*, 邦訳89ページ) と定義し、その形態として「互酬」、「再分配」、「交換」の3つを挙げているが、彼は古代ギリシャ社会を主要な「統合形態」のうち互酬が中心の社会として把握する⁽⁵⁾。

ポラニーの影響のもとに、こうした互酬的経済が中心の社会として古代ギリシャ社会を位置づけたのは、ギリシャ史の研究で知られるフィンリー (M.

(4) ポラニーのいう「相互的分与」あるいは「分与の互酬性」については Sahlins [1965] (山内 昶訳『石器時代の経済学』第5章「未開交換の社会学」) が詳しい。

(5) ポラニーのギリシャ史への関心については、Humphreys [1978], とくにその第2章に詳しい。

I. Finley) である。フィンリーは、古典期のアテナイ（アテネの古名）における互酬的経済について論じている。彼の『オデュッセウスの世界』は、ホメロスの作品と伝承される『オデュッセイア』を対象に、ギリシャ神話を題材にした英雄たちの社会について、名誉と地位をめぐる互酬的な競争に支配される社会として描写している。フィンリーによれば、『オデュッセウスの世界』とは古代アテナイ社会そのものであり、この社会は互酬的経済社会が支配的なものであったと特徴づけている（Finley [1954]）。

フィンリーはまた、古代ギリシャ社会について次のように述べている。「コイノニア（koinonia：共同体）は、アリストテレスの『倫理学』と『政治学』の中心的な概念である。その意味する範囲は、コイノニアの最高形態のポリスそれ自体から、航海の船員や軍事行動における軍人、あるいは商品の交換における相手といった一時的な関係にまで及んでいる。それは“自然な”仲間関係であり、人間は本来、共同体的存在（zoön koinonikon）であり、家族的存在（zoön oikonomikon：household-being）であり、政治的な存在（zoön politikon：polis-being）である。純粋なコイノニアが存在するためには、いくつかの条件が必要である。それは、①その構成員が自由人である、②共通の目標を持つ、③場所、財貨、儀式、食事、良き生活願望、負担、苦痛といった何らかのものを共有している、④構成員相互間に友愛（*philia*）と信義（*dikaion*）との感情が定着していることである。このように、キー概念としてのコイノニアには多様な意味が込められている」（Finley [1970] p. 7）。

フィンリーの基本的な枠組みを踏襲しながら、経済史家のミレット（Paul Millett）は、その著『古代アテナイの貸借』において、古典期アテナイにおける人々の貸借関係について論じ、次のように指摘する。「[古代アテナイにおいて] すぐに目立つのは、友愛（friendship）のさまざまな責務についてのアリストテレスの定式化と社会的距離に基づく互酬的信用のモデルとの対応である。……その場合、貸し手と借り手の間の親交の減少が、形式的な利

子負担と担保の必要な非個人的な貸し付け取引の機会が増大したことが示唆された」(Millett [1991] p. 110)。次のようにも言う。「利子、担保、証拠物件および文書化された契約の不在が貸し手と借り手の間の契約の明確な声明となった」(*Ibid.*, p. 219)。古典期アテナイにおける人々の貸借関係の内実についてこう説明するのである。ミレットによれば、古典期アテナイの市民たちの経済社会は、相互扶助と互酬によって構成されるネットワークであり、互酬性によって親族内部の貸借が期限を定めずに行われる。一方、市民間の貸借は無利子が前提であった。こうした市民相互の間の貸借とは対照的に、商業上の貸し付けは利潤を求めて高利で行われた。ミレットは、市民共同体の相互扶助原理に基づく貸借と、そのような相互扶助原理に立脚しない商業的な貸借を対立的に論じている。すなわち彼の分析は、市民社会における経済活動の領域と利潤追求的な商業活動の領域を明別するフィンリーの枠組を受け継ぎ、市場的経済と互酬的経済との「棲み分け」が生じていたことを示唆しているのである (*Ibid.*)。

シーフォード (Richard Seaford) は、『互酬と儀礼』の序論において「わたしは互酬性の分野に歴史的考察を行い、主として互酬的関係のネットワークに基づく社会から、交換手段として唯一の貨幣標準を用い、儀式によって、領土を守る必要によって、そしてポリスの組織によって結ばれた市民社会へと変形させた経済的および政治的發展を描写する」(Seaford [1994] p. xviii) と述べた後、互酬と儀礼の関係について以下のような議論を展開する。シーフォードは、ギリシャ神話を題材にした英雄たちの社会（ホメロス社会）では、英雄たちの人間関係は贈与と歓待、名誉と報復という互酬的な競争と、それに伴う儀礼によって形成されていると主張する。こうした互酬的な競争は、互いに扶助し合う友人同士の関係においても、名誉を求めて争い合う敵同士の関係においても生じた。けれども相互の互酬的な競争のあとには、両陣営それぞれの結束を再確認するための統合儀礼が用意された。このことは、

やはりホメロスの著作といわれる『イーリアス』において、生贄、葬儀、秘儀、結婚といった儀式が両陣営の統合儀礼として描かれているのと同様である。シーフォードによれば、こうした協調的価値観は、共同体（ポリス）の発展につれて競争的価値観よりも重視されるようになる。そして競争的価値観は、ポリスにおける民主制の浸透につれて協調的価値観に推移する。民主制的な価値観においては、共同体の秩序を乱しかねない英雄的行為よりも共同体全体の調和が重んじられるようになったというのである（*Ibid.*, Chap.⁽⁶⁾ 10）。

以上から明白のように、ボラニーもフィンリーもミレットもシーフォードも、古代ギリシャ社会は、市場における競争原理に基づくというのではなく、共同体の秩序維持のための互酬の原理に立脚するような社会であると力説するのである。アリストテレスの貨幣起源説や貨幣機能説を把握するためには、このような共同体内部（あるいは共同体間）の互酬原理を理解することがどうしても必要であるように思われる。

Ⅲ アリストテレスの系譜

第Ⅰ節で述べたように、貨幣の起源についての考え方は、2つに大別することができる。自然発生説（自生説）と人為的起源説である。前者は、人々が物々交換の不便を克服するために考え出した貨幣であり、これは自然発生的に生じた貨幣の範疇に属する。これとは対照的に後者は、社会や国家と諸個人間、あるいは人々相互の間の一定の合意や協約、法律や慣習などに基づいて生成した貨幣であり、広義の社会契約説に立脚する人為的起源説に属する。後者に属する貨幣起源説としては、アリストテレスの貨幣起源説や17世紀のプーフENDORFの貨幣起源説、18世紀のハチスンおよびアダム・スミ

（6） 以上のミレットとシーフォードの見解については、栗原 [2012] に負うところが多い。

スの貨幣起源説、それに20世紀初頭のクナップによって提唱された貨幣法制説（貨幣国定説）がその代表的なものである（ただし、クナップの貨幣法制説については別の機会に論じる予定なので、ここでは省略する）。以下では、プーフェンドルフ、ハチスンおよびアダム・スミスを取り上げ、それぞれの見解について検討しよう。

社会的合意を貨幣の起源とみなすアリストテレスの見解は、17世紀の自然法哲学を代表する思想家プーフェンドルフ（Samuel von Pufendorf, 1632-1694）に受け継がれる。プーフェンドルフは、「国際法の父」あるいは「自然法の父」とも呼ばれるオランダの法学者グロティウス（1583-1645）やイギリスの哲学者ホッブズ（1588-1679）などの影響を受け、彼らの思想を発展させて主著の『自然法と国際法』、およびそれを要約した『義務論』を著す。彼は「社会契約」を重視するこれらの著作において、貨幣の起源としての社会的合意説を展開する。プーフェンドルフによれば、人間は本性上、自己を愛し、利得を追求し、何よりも自己保存に配慮する存在である。ただし、人間はいかに自己保存本能が強くとも、他人の助力なしには存在しえないほど無力である。そして人間の社会性は、人間本来のものではないけれども、社会的で平和な生活を送ることは、人間の本性からの必然的要求である。自然法の根本原則は、各人はその能力に応じて他者との平和的社会を形成しなければならないというものである。このような必然的帰結は、理性によって把握されるものであり、自然法そのものも理性の命令に帰着するものにほかならない（恒藤 [1968] 86ページ）。こうしてプーフェンドルフは、人間の無力さと助力の不可欠さのために、自然状態はきわめて不安定であり、人間は自己保存のため、また幸福の達成と相互の利益の確保のために、互いに協力して社会的で平和な社会状態を形成しなければならないと考える。それゆえ、各人が社会的に平和な社会状態を形成することは、人間本性に由来し、理性に媒介された自然法の根本原則であると結論づけられる。

プーフェンドルフは、主著『自然法と国際法』の「価格について」と題する第1章冒頭において次のように論じている。「人々に所有されるモノの性質が異なり、人々の必要に応じて同じサービスを提供しないという事実からみて、また同じモノであっても、その諸部分があらゆる点で同じではないモノがさまざまな人々に属するようになったり、異なった性質のモノが互いに交換されねばならないということがしばしば生じる。それゆえ、人々の合意 (agreement of men) によって何らかの尺度がそれらに設定され、その尺度に応じて異なった性質のモノが互いに比較され、等しくされる。モノは互いに比較され、均等性は数量の一致であり、数量に基づいて均等化されるから、われわれは次にはモノの数量や作用について、それらが人々の生活に役立つ限り、数量の基礎と共通の尺度について考慮しなければならないだろう」(Pufendorf [1964] p. 675, 傍点は引用者)。

この記述が示すように、プーフェンドルフは「人々の合意」に基づいて価値尺度が導入されたと主張するのである。こうした主張は、アリストテレスが『政治学』や『ニコマコス倫理学』、さらには『大道徳論』で展開した考え方と同一であり、プーフェンドルフ自身が『自然法と国際法』の中でこれらのアリストテレスの著書を引用している (*Ibid.*, p. 651)。人々の合意によって価値尺度が導入されたという人為的な貨幣生成論を展開した点で、プーフェンドルフはアリストテレスの見解に忠実であったと言えよう。

プーフェンドルフは、原始的な物々交換の時代よりも経済が発達して人々の文化的水準が高くなっても、価値尺度としての貨幣の重要性は変わらず、その価値尺度が人々の合意によって獲得されたとして次のように指摘する。「より高度な文化を享受するほとんどの国民にとっては、合意によって他のモノの適切な尺度として役立ち、他のモノがそれに十分に包含される、ある特定のモノに卓越的価格 (eminent price) を設定することが最善に思われる。人はそれを一つの媒介物とすることによって販売されるどんなモノでも自分

自身のために入手し、すべての商業を遂行し、そして完全な便宜さをもってあらゆる合意を達成することができたのである」(*Ibid.*, p. 690, 傍点部分は原文ではイタリック)。また『義務論』においても、財の価値は「通常価値」(common value)と「卓越価値」(eminent value)に分かれるとして、「通常価値は、商業に入り込みわれわれに利用とよろこびを与えてくれるモノや作用あるいはサービスに見出される。卓越価値は貨幣に見られる。というのは、貨幣が事実上あらゆる財・サービスの価値を含んでいるものであり、それらに共通の尺度を提供するものとして受け入れられるからである」(Pufendorf [1991] p. 93)。貨幣は通常の財・サービスとは異なって、「卓越価値」を有する⁽⁷⁾というのである。

以上のように、プーフェンドルフは貨幣の起源を共同体における人々の合意ないし契約に求め、それを繰り返し強調する。例えば『義務論』では、「いっそう十分な生活方法を希求するほとんどの国民は、ある特定のモノに他のすべてのモノの通常価値に関連し、かつそれらが事実上含まれる卓越価値を賦与するよう合意によって決定した。その結果、誰もが売りに出されたどんなモノでも自分自身のために手に入れることができ、あらゆる種類の商取引や契約をすることができる」(*Ibid.*, p. 96, 傍点は引用者)と主張し、『自然法と国際法』では、金や銀などの貴金属が、運搬の容易さ、高価値、耐久性、任意に分割可能などの自然的諸性質によって貨幣に最もふさわしいと指摘する(Pufendorf [1964] p. 691)。そして、「この貨幣の機能が、自然的性質から生じる必然性によって与えられるのではなく、人々の賦課と合意によって与えられる」(*Ibid.*, p. 692, 傍点は引用者)という。こうしてプーフェンドルフは、貨幣の機能なり貨幣の起源を人々の合意に求めるのである。ただし重要であると思われるのは、プーフェンドルフもアリストテレスもと

(7) ここでは、「卓越価格」と「卓越価値」は同義に用いられている。

もに貨幣の起源を共同体における人々の合意ないし契約という社会的合意に求めているのは確かであるにしても、それはあくまでも形式的な同一性にほかならないことである。すなわち、両者の時代的背景は大幅に異なり、ポラニーが指摘したような「互酬」、「再分配」および「交換」に特色づけられる社会システムは、まったくプーフェンドルフの対象とはならないのである。⁽⁸⁾

フランシス・ハチソン (Francis Hutcheson: 1694-1746) はアイルランド出身のスコットランドの哲学者であり、1730年からその死去まで、グラスゴー大学の道德哲学講座の教授の職にあった。ハチソンは、倫理学と自然法学の両者を包摂する道德哲学の体系化を図り、道德的価値の認識基盤としての道德感覚 (Moral Sense) という概念を展開して人間の社会性としての「仁愛の思想」を力説した道德哲学者として知られている。彼はまた、「スコットランド啓蒙思想の父」であるという高い評価を残している。彼の講義を聴講し、後に彼のポストを継いだアダム・スミスの『道德感情論』や『国富論』に無視できない影響を与え、さらにヒュームやカントの倫理思想にも大きな影響を与えたとされている。⁽⁹⁾

ハチソンはスミスの師であるばかりか、プーフェンドルフの継承者でもあり、貨幣起源説におけるプーフェンドルフの社会契約説ないし合意説がハチソンの貨幣論へと発展したと考えられる。そのことは、ハチソンの『道德哲学序説』における次のような一文からも明らかである。「契約 (contracts) は生活において絶対的に必要であり、また、その信義 (faith) を守ることも同様である。最も豊かな人々は、貧しい人々の財や、労働を必要としなければならぬが、彼らはそれらを実償で〔獲得できると〕期待すべきではない。それらについて相談し、契約を結んで、両者が互いの実行〔すべき事項〕について同意できるようにしなければならない」(Hutcheson [1747] 邦訳218

(8) プーフェンドルフについては、前田 [2004] も参照されたい。

(9) ハチソンの経歴については、Scott [1900] が明快で詳しい。

ページ)。ハチソンは、このようにも述べている。「契約における信義という神聖な責務は、その美しさとその反対の行為の醜さに対する直接的な感覚からだけでなく、もしこの責務に背けばただちに起こるに違いない損害からも明らかである。信義に背くことは、その他の同じ状況で、契約によらずに負う義務を怠るか、拒否したことよりも、明らかに社会的な本性にいつそう反し、また、しばしばいつそう卑しい侵害となる。信義に背くことでわれわれは、われわれの正直さを信頼し、もしわれわれが信義を守っておればその必要とする助けを獲得したかもしれない人々の意図を完全に打ち砕くことになる。そして、商業の必要性から必然的に明らかのように、契約に基づく権利は、完全な種類の権利であり、強制力によっても追求されるべきである。自己の役割に誠実な人は、人々の間のすべての社交を破壊する」(Ibid., 邦訳 218-219ページ、傍点は原文ではイタリック)、これらの記述は非常に明晰な内容であり、敢えて蛇足を加える必要はないけれども、ハチソンが人々の間の「契約」あるいは「信義の順守」をいかに大切にしているかを窺い知ることができる。まさに道徳哲学者としてのハチソンの面目躍如たるものがある。

ここで、ハチソンの貨幣起源説について一考してみよう。ハチソンはこう述べている。「隣人が豊富に持つある財を私が欲していて、しかも私は、自分の利用を超えてその他の財を豊富に持つのだが、彼は、私が余分に蓄えるいかなる財も必要としないかもしれない。あるいは、私が自分の必要を超えて蓄える財は、私が隣人に望むすべての財よりまったく高い価値を持つのに、私の財は、大きな損失なしには諸部分に分割できないかもしれない。これらのことはたびたび起こりうるから、商業を営むためには、何らかの基準となる財が同意されなければならない。つまり、あるモノがその他のあらゆるモノの価値基準として定められ、しかも、それがきわめて全般的に受容されるので、誰もがそれによって自分の望むすべてのものを獲得できるという理由で、他の財との交換によろこんでそれを受け取るようにならねばならない。

そして実際のところ、あるモノがこのようにすべての価値の基準にされると、直ちにそれへの需要は普遍的になるだろう」(*Ibid.*, 邦訳255ページ, 傍点は引用者)。いうまでもなく、この記述は、「欲求の二重の一致」の困難を克服するためには価値尺度(価値基準)を導入することが必要であり、その価値基準となる財の一般的受容性が確保されることが不可欠であるというのである。現代においても通用する標準的な考え方であると言える。

ハチソンの次のような指摘も注目に値する。「生活の必需品や便益品を供給する、例えば20人という一定人数の労働の生産物は、1人にある1種類の仕事を割り当てて彼がすぐに技能と技巧を獲得するようにし、別の人には別の種類の仕事を割り当てるようにする場合に、20人のそれぞれの人が生存にとって必要な異なった種類の労働のすべてに順番に従事しなければならず、どの仕事でも十分な技巧を得られない場合よりもずっと多いことはよく知られている。前者の方法では、それぞれが大量の1種類の財を獲得し、その一部を他の人々の労働によって得られる財と交換することができる。ある人は耕作地で熟練し、別の人は牧草地で牛の飼育に熟練し、第3の人は煉瓦職に熟練する。……こうしてすべては、完全な技能を持つ人々の仕事と物々交換の手段によって供給される。他の方法では、誰もどのような1種類の労働において器用で熟練することはほとんどできないだろう」(*Ibid.*, p. 288)。いうまでもないが、この記述は、スミスが強調した社会的分業の重要性を指摘したものであり、こうした見解がスミスに大きな影響を与えた可能性がある。

ところで、物々交換の不便を解消し一般受容性を確保することが不可欠であるとしても、問題となるのは、そうした目的を達成するためには具体的にどのような財が適格であるかという点である。こうした貨幣となるべき財の適格性に関して、ハチソンはこう指摘する。「標準におけるこれらの必要条件のいずれかは、われわれに最も普及している財の多くがその目的にとって不便であることを示している。私の穀物のわずかな量を欲する人は、それと

引き換えに彼の家畜を私に与えないであろう。なぜなら、彼の家畜は分割することができないからである。私はおそらく1足の靴を欲しいと思うであろう。しかし私の牛ははるかに高価値で、相手は牛を必要としないかもしれない。私は遠い国へ旅行しなければならないが、耐えがたい費用をかけなくては穀物を私の扶養のために携帯することはできないし、ワインは運搬中に悪くなるであろう。したがって、人々が希少金属である金銀の用途を装備品や家庭用品に発見したときに金銀への需要が生じ、まもなく人々は、金銀が交易に最も適した標準であることも見出したのである」(*Ibid.*, p. 56)。こうしたハチソンの貨幣起源説は、プーフェンドルフの契約説ないしは合意説を継承しつつも、それを彼自身の貨幣論へと発展させたものである。すなわち、物々交換の不便を解消するために一般的受容性を有する金銀の貴金属を貨幣として導入することを提唱するのである。

このほか、ハチソンは当時直面していた現実の経済的諸問題についていくつかの重要な提言を行っている。例えば、こう主張する。「商業は富の自然の源泉であり、言い換えれば、すべての輸出用製品の基金であり、一国は輸入品の価値を超えたその剰余によって富と力を増加させるのである。勤勉な農業は生活の必需品とあらゆる製造品へ原料を供給するに違いない。そして、すべての機械的技術は国内の使用と輸出用に製造品を供給するよう奨励されるべきである。輸出用の財貨は一般にあらゆる負担と税を免れるべきであり、職人によって必ず消費される財貨も、他の国が海外市場で同様の財貨をより安価に販売できないように、そうすべきである」(Hutcheson [1755] p. 318)。このスミスの師であるハチソンの提言は、自国産業の保護と輸出増進のための重商主義的政策にはかならない。この点では、一貫して重商主義政策に反対するスミスとは対照的である。

さらにハチソンは、使用価値と交換価値の相違についても明確に意識している。ハチソンによれば、「最高の有益性をもちながら、まったく価格が付

かない、あるいは低い価格しか付かない財がある。自然の中は非常に豊富にあるので、ほとんど何の労力も払わずにそれらを獲得できるとき、それらには価格が付かない。簡単な普通の労働でそれらを獲得できるとき、それらには低い価格しか付かない。最も有用で必要な事物が、一般的に非常に豊富にあって、容易に獲得できることこそ、われわれに対する神の善性である」(Hutcheson [1747] 邦訳254ページ)。すなわち、ハチソンは使用価値と交換価値の乖離⁽¹⁰⁾という周知の価値のパラドックスにも着目するのである。

次に、ハチソンに大きな影響を受けたアダム・スミス (Adam Smith: 1723-1790) の貨幣起源説について、その基本的な考え方を検討しよう。ただスミスについては内外ともにおびただしい研究の蓄積があり、以下では本稿の主題に関連する点に限定して、なるべく簡単に述べることにしたい。

スミスは『国富論』の冒頭において、「分業」を近代社会の発展の原動力であること、その分業を引き起こすのは「交換」であり、分業の大きさは「交換」の力の大きさ、すなわち市場の広さによって制約されること、そしてその交換を円滑にさせる普遍的用具として「貨幣」が生成したとの自説を展開する。こうした考え方は周知のとおりである。スミスは人々の分業が必

(10) この使用価値と交換価値の乖離という価値のパラドックスについては、周知のように、スミスによっても指摘されている。スミスは、「最大の使用価値をもつ物が、しばしば交換価値をほとんどまったくもたないことがあり、これとは反対に、最大の交換価値をもつ物が、しばしば使用価値をほとんどまったくもたないことがある。水ほど有用なものはないが、水ではほとんど何も購入できないし、それと交換にほとんど何も入手できない。反対にダイヤモンドは、ほとんど何の使用価値ももっていないが、それと交換に非常に大量の他の財貨をしばしば入手することができる」(Smith [1789] 邦訳50ページ)と述べている。しかし、ハチソンが用い、スミスもそれを受け継いだ使用価値と交換価値の乖離というパラドックスと呼ばれる命題については、すでにジョン・ロー (John Law) が具体的な例として水とダイヤモンドの関係を挙げて説明している。スミスがハチソンを模倣し、そのハチソンがローを模倣したか否かは明らかではないが、どちらも出典を明示していない。この価値のパラドックスをめぐるローとスミスの関係については、古川 [2015] 215ページを参照されたい。

然的に交換を招くというのであるが、人々の間で交換が成立することはそれほど容易ではないとして次のように述べている。「分業が発生しはじめた当初は、こうした交換の力はしばしばその作用を大いに妨害されたに違いない。ある人がある商品を自分で必要とする以上に持っているのに、他の人はそれを持っていない、と仮定しよう。すると前者は、この余剰物の一部をよろこんで手放すだろうし、後者もそれをよろこんで購買するだろう。ところがもしこの後者が、前者が必要とするものをたまたま何も持っていないなら、彼らの間にはどんな交換も行われるはずはない」(Smith [1789], 邦訳『国富論 I』40ページ)。これまで繰り返し述べたように、物々交換が成立するためには、「欲求の二重の一致」の成立することが不可欠の要件であるからである。このために「交換の力はしばしばその作用を大いに妨害された」のである。

そこで、スミスは言う。「このような事態の不便を避けるために、社会のあらゆる時代の世事にたけた人たちは、分業がはじめて確立されたあと、おのずから事態を次のようなやり方で処理しようとつとめたに違いない。すなわち、世事にたけた人は、自分自身の勤労の特定の生産物のほかに、ほとんどの人が彼らの勤労の生産物と交換するのを拒否しないだろうと考えられるような、何らか特定の商品の一定量を、いつも手元に持っているというやり方である」(*Ibid.*, 邦訳40ページ)。こうした「ほとんどの人がかれらの勤労の生産物と交換するのを拒否しないだろうと考えられるような、何らか特定の商品」とは、いうまでもなく「貨幣」である。貨幣は、それが存在しない状況のもとでの交換に必要な情報量、あるいは取引を実現するのに必要な費用(取引費用)を大幅に節減することによって、物々交換に伴う偶然性、局所性を克服し、社会的な交換の可能性を飛躍的に増大させるのである。

スミスは、交換の不便を回避するために、「さまざまな商品が次々と考えられ、また使用されてきたようだ。社会の未開時代には家畜が交易の共通の

用具であったといわれている。家畜はそのような用具としては大変不便なものだったに違いないが、それでも昔は、物の価値が、それと交換される家畜の頭数にしたがって示された場合が多い。……私の聞くところでは、今日スコットランドのある村では、職人が貨幣の代わりに釘をもってパン屋や居酒屋に出かけることも珍しくないという話である」(Ibid., 邦訳『国富論 I』41ページ)と貨幣の起源について述べ、耐久性、可分性に優れた金や銀などの貴金属が貨幣として採用されるようになったというのである。「どの国においても人々は、反対しようのない理由から、貨幣として用いるために、他のあらゆる商品に勝るものとして最終的に金属類を選ぶことに決めたように思われる。金属類ほどもちのよいものは他にないのであって、金属は他のどんな商品に比べても保存による損耗が少ないばかりか、何の損失もなしに任意の数の部分に分割できるし、またこの分割部分は、損耗なしに溶解によって再び容易に一つにすることもできる。この性質こそ、同じように耐久性のある他のどんな商品にもないものであり、そしてこの性質が、他のどんな性質にも勝って、金属類を商業と流通の用具に達するものになっているのである」(Ibid., 邦訳『国富論 I』41-42ページ)。

金属貨幣のなかでも、貨幣の素材としての性質に優れ、一定の純度を表示する刻印された貨幣が用いられ、次いで一定の重量をも表示する鋳貨制度が導入された。鋳貨制度のもとでは、あらゆる国でしばしば貨幣の改鋳が生じた。「そのような操作(鋳貨の改悪—引用者)は、債務者にとってはいつも好都合であるが、債権者にとっては破滅的な影響を与えることが明らかであり、そして時にはそれが、大きい社会的災難によって引き起こされるよりもいっそう大きな、いっそう普遍的な変革を、私人の財産のうえにもたらした」(Ibid., 邦訳『国富論 I』邦訳48ページ)。スミスはこうして、貨幣という普遍的用具の媒介によって、すべての種類の財貨は売買され、相互に交換されるようになったと説明する。以上が、『国富論』におけるよく知られた貨幣

出現の論理であり、貨幣は物々交換の困難を解消する「商業の普遍的用具 (universal instrument of commerce)」(*Ibid.*)、あるいは「流通の大車輪 (great wheel of circulation)」(*Ibid.*, 邦訳『国富論Ⅰ』446ページ)として機能したと論じるのである。

さらにスミスはこう述べている。「金・銀貨の代わりに紙券を代位させることは、きわめて高価な商業上の用具を、経費のずっとかからない、同じように便利な道具で置き換えることである。流通は新しい車輪で行われるようになるのであって、この車輪は、建造にも維持にも古い車輪に比べて経費がかからない」(*Ibid.*, 邦訳『国富論Ⅰ』447ページ)。これがスミスのいう金紙代替 (substitution of paper for gold and silver) である。そして、「紙券が金属貨幣に代位されると、材料、道具、生活資料などの流動資本が増え、雇用される労働の量は、それだけ増加される」(*Ibid.*, 邦訳『国富論Ⅰ』452ページ) というのである。

本節を閉じるにあたって、「貨幣とは何か」についてのスミスの興味深い見方を紹介しよう。「商人が、財貨で貨幣を買うよりも、貨幣で財貨を買うほうが一般に容易だと思うのは、富が、その本質からして、財貨よりも貨幣から成っているからではない。そうではなくて、貨幣が人々によく知られ、安定した商業用具であって、それと引き換えならば、なんでも容易に与えられるが、しかし必ずしもいつもこれと同じ容易さで、物々交換に貨幣が得られるというわけではないからなのである」(*Ibid.*, 邦訳『国富論Ⅱ』93ページ)。「しかも大部分の財貨は貨幣よりも持ちが悪く、商人がこれを抱え込んでいると、貨幣を抱え込んでいるよりも、ずっと大きな損失を被ることがしばしばあるだろう。また、彼の商品の代金が金庫に入れてある場合よりも、商品が手元にある場合のほうが、到底支払いに応じきれないほどの貨幣の請求を受けることが多い。こうした事情に加えて、彼の利潤は、商品の買い付けによるよりも、直接には商品の販売から生じるものであり、したがってこ

れらすべての理由から、商人は一般に、彼の貨幣を商品と交換することより、彼の商品を貨幣と交換することのほうに、はるかに熱心なのである」(Ibid., 邦訳『国富論Ⅱ』93-94ページ)。「財貨は、貨幣が財貨を引き寄せるほどすぐには、貨幣を引き寄せるとは限らないが、長い目で見れば、貨幣が財貨を引き寄せることに比べてさえも、いっそう必然的に、財貨は貨幣を引き寄せるものである。財貨は、貨幣を買うことのほかにも、他のさまざまな目的に役立つが、これに対して貨幣は、財貨を買うことのほかは、何の役にも立たない。したがって、貨幣は財貨のあとを追いかけるをえないが、財貨は必ずしも貨幣を追い回さないし、本来、その必然性もないのである。……これに引き換え、財貨を売る者は常に、得た貨幣で改めて別の財貨を買おうと思っている。だから、前者は財貨を買ってしまえば、多くはそれでことが済むが、後者は、財貨を売るだけでは仕事の半分にもならないのである」(Ibid., 邦訳『国富論Ⅱ』94-95ページ⁽¹¹⁾、傍点は引用者)。そしてスミスはこ

(11) 以上のスミスの見解とはまったく独立に、マルクスは次のように述べている。「商品は貨幣を恋こがれるが、『真実の恋はなかなかうまくはいかない』と言わざるをえない」(Marx [1890] 邦訳215ページ)とのシェークスピアの『真夏の夜の夢』の巧みな比喩を用いて、商品と貨幣との緊張する対立関係を論じている。この有名な表現も、商品の所有者はいつでも所持する商品の販売を切望しているものの、それを実現することは容易ではないという現実に対応する。マルクスは、「販売は同時に購入であり、購入は同時に販売であるという理由で、商品の流通が販売と購入を必然的に均衡させるという理論があるが、これほど愚かしい理論はない」(Ibid., 邦訳226ページ)と述べ、いわゆるセー法則の欺瞞性を批判する。マルクスはこう述べている。「買い手はいまでは商品を手にしており、売り手は貨幣を手に入れている。貨幣とは、流通において使われうる形態を維持している商品であり、やがては遅かれ早かれ、再び市場に現れることになるだろう。買ってくれる相手がいなければ売ることではできない。しかし誰も、売ったからといってすぐに何かを買わなければならないわけではない。流通は生産物の交換にそなわる時間的、空間的個人的な制約を突破する。それは生産物の交換では、自分の労働の生産物を譲渡することが、他人の労働の生産物を取得することと直接に同一であるが、これに対して商品の流通では、この同一性が販売と購入の対立のうちに分割されるからである」(Ibid., 邦訳227-228ページ)。すなわちマルクスは、販売と購入とは対立した行為であり、対極的な立場にある商品の所有者と貨幣の所有者との間に非対称性が存在

う言うのである。「人が貨幣を求めるのは、貨幣そのものが欲しいからではなく、貨幣で買うことの出きる財貨が欲しいためなのである」(Smith [1789] 邦訳『国富論Ⅱ』95ページ)。

本節では、いわゆる社会契約説に属する人為的な貨幣起源説として、アリストテレスの思想の流れを継ぐブーフェンドルフ、ハチソンおよびスミスの基本的な考え方をフォローした。ただし当然のことながら、彼らの考え方の間にもかなりの相違があることは歴然としているのである。

Ⅳ アリストテレス貨幣論の再評価

アリストテレスの貨幣論は、現代に至るまで無数と言ってもよいほど多くの論者によってさまざまに評価されている。筆者の大まかな印象では、近年になるほどアリストテレス貨幣論に対する再評価が高まっているように思われる。アリストテレスを異なった視点から理解することにも役立つので、以下ではアリストテレスの貨幣起源説の評価に関する従来の代表的な2つの見解を取り上げよう。

先ずシュンペーターである。彼はアリストテレスについて次のように述べている。「アリストテレスが……唱えた貨幣の理論は次のようなものであった。およそ共産主義を除くすべての社会では、現実には財貨や用役の交換が行われる。この交換は、まず最初は物々交換の形態をとるのが「自然」である。

すると指摘するのである。マルクスによれば、「商品の最初の変身としての販売」とは、「商品の命懸けの飛躍である」(*Ibid.*, 邦訳212ページ)ということになる。こうしたマルクスの見方は、スミスのそれときわめて似通っている(古川 [2016] 50-51ページ)。こうした貨幣と商品の関係について、スミスとマルクスの見解がきわめて類似しているというのは意外であるけれども、本当である。

またクラウワーは、「貨幣は財を買う。しかし、財は財を買わない」(Clower [1969] pp. 207-208)と述べている。この言葉は、一般的受容性を有する特殊な「財」としての貨幣の重要性を的確に示しているが、このクラウワーの表現もスミスの見解と通底していることは指摘するに値する。

ところが他人の持っているものを欲する人が、この他人の欲するものを持っていない場合がある。したがって人は次に続く物々交換によって、自分の現実に欲するものを得るために、ひとまず自己の欲しないものをも交換において受けとっておくこと（間接交換）が、必要となる場合も少なくないであろう」（Schumpeter [1954] 邦訳、107ページ。「ここにおいて人々は明白な便宜のために、黙契によるか立法的措置によるかは別としても、ある一つの商品——アリストテレスは一つ以上の商品を選ぶかもしれぬという可能性を考えなかった——を、交換の媒介手段として選ぶという気になるであろう。アリストテレスはある種の商品——例えば金属——が他のものよりもよく適しているという事実を簡単に述べて、19世紀の教科書で、同質性、可分性、持ち運び可能性、相対的安定性等々について、述べられている最も陳腐な章句のあるものの先駆けとなった」（*Ibid.*, 107-108ページ、傍点は原文ではゴシック体⁽¹²⁾）。

シュンペーターによれば、アリストテレスの理論は、第1に、貨幣の機能の本質的な役割は、何と言っても交換の媒介手段として働くこと、第2に、貨幣が諸商品の市場において交換の媒介手段として役立つためには、貨幣自体がこれらの商品の一つでなければならないことを主張する。それゆえ、「貨幣という商品も、他の商品と同様に重量と品質によって測られる。ただ便宜上の理由によって、人は毎度その重量を測るのを省くために、貨幣にスタンプを捺すことを決めうるが、このスタンプはただ鑄貨に含まれる商品の数量と品質を公示し保証するだけのもので、決してその価値の原因となるものではない。これこそわれわれがプラトンの理論が一例である貨幣の表券説（Cartal Theory）に対比して、貨幣の金属説（Metallism: Metallist Theory）と呼ぶものと等しいのである」（*Ibid.*, 邦訳108-109ページ、傍点は原文では

(12) この引用については、Polanyi, Karl [1971] 邦訳228ページ注2も参照されたい。

ゴシック体⁽¹³⁾。

次にポラニーのアリストテレス評価である。ポラニーは「アリストテレスによる経済の発見」という有名な論文の冒頭で次のように述べている。「今日、アリストテレスの「経済学」は軽蔑の対象になっているが、この軽蔑には深い意味が潜んでいる。……今日の指導的な学者たちは、経済に関するアリストテレスの教えが不十分であり、無意味でさえあると判断しているのである」(Polanyi [1957] 邦訳187ページ)。そして、「結局のところ、経済分析は市場メカニズムという、アリストテレスがまだ見たことのなかった制度の機能の解明を目指しているのである」(*Ibid.*, 邦訳189ページ、傍点は引用者)というのである。ポラニーによれば、「近代以前には、人間の暮らしの形は人間の組織的存在の、ほかの部分ほどには意識的な注意を引かなかったのである。親族組織や呪術や儀礼などが強力なキーワードを持っていたのとは対照的に、経済は名前のないままであった。原則として、経済の用語を支持するような用語は存在しなかった。……部族やトーテム、性や年齢集団、精神やトカラや儀式のしきたり、慣行や儀礼などが、高度に複雑なシンボル体系を通じて制度化されていたのに対して、経済には、人間の動物的存在のための食糧供給の重要性を伝えるような、いかなる言葉からも名前は与えられなかった」(*Ibid.*, 邦訳194-195ページ)。ポラニーは彼自身の見解を次のように結論付け、アリストテレスを擁護する。「(アリストテレスの『倫理学』においては) 交換は互酬性の行動の一部をなすものとして考えられており、互酬性の観念に付随する寛容や美德とは正反対の性格を、物々交換に与えるようになった市場的な考え方とはまさに対蹠的である」(*Ibid.*, 邦訳223ページ)。

(13) 貨幣の表券説と貨幣の金属説については、プラトンよりはるかに後にクナップの『貨幣国定説』において詳細に論じられた。クナップは貨幣の表券説について次のように述べている。「貨幣は常に表券的支払手段 (Chartale Zahlungsmittel: Chartal means of payment) である。すべての表券的支払手段をわれわれは貨幣と呼ぶ。貨幣の支払い手段はそれゆえ表券的支払手段である」(Knapp [1905] 邦訳48ページ)。

したがって、「アリストテレスには、発達した市場メカニズムの働きを述べたり、それが交易の倫理に及ぼす影響を論じたりできるはずはなかったのである」(Ibid., 邦訳224ページ)。

アリストテレスの見解は、シュンペーターの見解より2100年以上も先立っている。シュンペーターからみれば、陳腐なことは当然である。しかし、アリストテレスが現在でも通じる説得的で標準的な貨幣起源説を展開したことは驚嘆に値する。むしろ、「端正で、単調で、いささか平凡で、かつまたいささかという程度を上回って勿体ぶった常識が見出される」(Schumpeter [1954] 邦訳97ページ)とアリストテレスを批判するシュンペーター自身の側に、大きな問題が潜んでいるように思われる。ポラニーが的確に批判するように、シュンペーターはあくまでも経済学的分析に終始しており、経済学の枠組の中に閉じこもっているという大きな限界がある。アリストテレスは、「ゲマインシャフトの哲学者」であり、アテナイを中心とする古代ギリシャ社会というのは、基本的に共同体（ポリス）の市民による互酬性社会である。ポラニーによれば、シュンペーターはそうした古代ギリシャの互酬性社会を対象にして、「市場メカニズムという、アリストテレスがまだ見たことのなかった制度」の機能の解明を目指していると批判する。いかに英才といえども、経済学的な分析に埋没するシュンペーターと、経済人類学の観点に立つポラニーの考え方とは対照的なのである。ポラニーは「アリストテレスによる経済の発見」という論文の最後に次のように述べている。「アリストテレスのおそらく最も大胆な学説は、今日でも、考える人々をその驚くほどの独創性によって圧倒するに違いない。しかし、そのような学説もこのようにして陳腐なものにされてしまったのである」(Polanyi [1957], 邦訳227ページ)。

アリストテレスの理論を陳腐なものとみなした張本人の一人がシュンペーターであることは間違いないが、しかしポラニーの分析によるアリストテレスの貨幣理論がきわめて新鮮であり、市場メカニズムを重視するシュンペーター

の貨幣理論が今やすっかり陳腐化しているように思われてならない。

以下では、その他のアリストテレスに対する主な評価について、時代順に追ってみよう。マルクスは、『資本論』第1巻第1章の価値形態論において、アリストテレスの分析に対する評価を行い、次のように述べている。「アリストテレスは、商品の価値形態は、単純な価値形態が発展して生まれたものであることを明快に指摘する。その単純な価値形態とは、ある商品の価値を他の任意の商品で表現する場合の価値形態である」(Marx [1890] 邦訳84ページ)としたうえで、こう指摘する。「商品の価値形態においては、すべての労働は同等な人間の労働であり、同等なものとして表現されることを、アリストテレスは価値形態から読みとることはできなかった。それはギリシャの社会は奴隷労働に依拠していたからであり、商品形態が労働生産物の一般的な形態となっている社会、したがって人間が互いに商品所有者として関係しあうことが支配的な社会関係になっているような社会においてである。アリストテレスの天才は、商品の価値表現のうちに、同等性という関係を発見したことのうちに輝いている。しかし彼が生きていた社会の歴史的な制約のために、この同等性の関係がどこにおいて実際に成立するのかを、読みとることができなかった」(Ibid., 邦訳86ページ)。マルクス独自の労働価値論の視座からの評価である。

岩井克人は次のように言う。「アリストテレスが語る貨幣創世記においては、その断絶は共同体の「申し合わせ」による貨幣の人為的な創造によって乗り越えられたことになっている。はじめに社会的な「行い」があったのではなく、共同体的な「申し合わせ」があったというのである。歴史の始原に共同体があるものを貨幣として使うことを申し合わせたことによって、そのあるものが「媒介者」となり、「本当は不可能」な交換を「十分に可能」にすることになったというのである。もちろん、この申し合わせさえあれば、それ自体に商品としての価値のないものが貨幣として選ばれても、いっくう

にかまわない。その内容を「変更したり、役に立たないものにするのは、われわれの自由であるからである」とアリストテレスはいう」（岩井 [1993] 93-94ページ）。この説明は、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』および『政治学』の見解を要領よくまとめている。ただし、これらの著作に対する解釈は経済学的な観点からの一面的な見方に終始している。すなわちポラニーが的確に指摘したように、アリストテレスが対象としたのは、古代ギリシャのポリスを中心とする互酬性社会なのである。岩井においては、アリストテレスが対象とした古典・古代ギリシャ社会の特色には言及されず、あくまでも経済学の枠組の中でアリストテレスの貨幣生成論を論じているに過ぎない。

次は、マイクル（Scott Meikle）のアリストテレス貨幣論についての見解である。マイクルによれば、アリストテレスの貨幣発展の理論には4つの段階と交換形態がある。その最初の交換形態は物々交換である。いまある商品（C）が別の商品（C）と直接に交換されるならば、これは $C-C$ と表現される。アリストテレスは、交換に持ち出される商品の数が増加すればするほど、「欲求の二重の一致」の不足のために交換システムは非効率にならざるをえないことを見出したのである（Meikle [1994] p. 27）。アリストテレスのいう第2の交換形態は、交換手段としてある商品（C）と別の商品（C）の間に貨幣（M）が媒介するものであり、この交換は、 $C-M-C$ と示される。ここでの貨幣は交換手段と同義であり、財やサービスの交換は貨幣を媒介にして間接的に行われる。アリストテレスはこのタイプの交換を、商品の売りと買いという2つの行為が貨幣によって分離される最も自然な形態とみなした。これとは対照的に、第3と第4の交換形態は不自然なものと考えられる。この場合、人々は貨幣（M）をもって自分の欲する商品を直接買うのではなく、商品（C）を購入するために市場に来て、その商品をより多くの貨幣（M）を得る目的のために市場で売却するのである。この交換形態は、 $M-C-M$ と示される（*Ibid.*）。以上の3つの交換形態とは別に、アリストテレスは

第4のものとして $M-M$ という交換形態を提示した。彼によれば、こうした交換の目的は、“貨幣から貨幣を育てる”という高利貸し (usury) 取引であり、4つの交換形態のなかでは最も影響の小さいものとみられる (*Ibid.*, p. 28)。以上が、マイクルによって提示され、明確化されたアリストテレスの想定する貨幣形態の輪郭である。

次にカリムサディ (S. Karimzadi) のアリストテレス評価を取り上げよう。彼はこう述べている。「貨幣の最初期の定義の中で、アリストテレスの定義は最もよく知られ、最も影響力をもっている。彼の定義は、その時代の常識的な経験から導き出される。古代ギリシャの社会的および経済的構造は、アリストテレスが彼の貨幣概念から導き出す土台である。当時用いられた貨幣の形態は、一般的に受容された形態であった。貨幣を一般的受容手段とみなす伝統は維持され、貨幣の起源の唯一の存続しうる説明となったのである」(Karimzadi [2013] p. 242)。非常に好意的で要を得た評価であると言える。

クレスポ (R. F. Crespo) は次のように評価する。「アリストテレスは経済学者ではなく、その当時の経済分析に類似した学問分野を発展させなかった。しかし、経済およびその倫理学や政治学との結び付きについての核心的概念を提供した。彼は経済学の近代の発展に影響を及ぼさなかったが、中世の経済的思考および現代の経済学者の基礎との関連に重要な影響を及ぼした」(Crespo [2014] p. 11)。クレスポはさらに次のように述べている。「アリストテレスは、ギリシャの思想家たちの間の、長く続く相当な倫理的および哲学的伝統の先駆者であった。経済学の領域では、彼の考え方はマルクスやメンガーといった初期の著作家およびセン (Amartya Sen) のような現在の著作家たちに影響を及ぼした。現在、ますます多くの文献がアリストテレスの経済学に関する考え方を汲み取り、繁栄する“徳の倫理学”が経済学や企業経営を含む人間行動のあらゆる分野に行き渡っている」(*Ibid.*, p. 127)。クレスポは、アリストテレス貨幣論の特色を4つに総括する。①アリストテ

レスによれば、経済的現実とは、生き甲斐のある人生を達成するために必要な物質的事物の利用と結びついた行動、能力、慣習そして知識である。②経済学は“実地的な”科学であり、現実の事実、規範的な特性、実際的な目的および方法論の多元性と密接に関連している。③アリストテレスはその実際の哲学において経済的諸問題を取り扱い、倫理学および政治学を背景にして経済学を有効に形作った。④アリストテレスにとって徳は政治的である。すなわち、徳は共同体の成員の間の触れ合いによってのみ発展され強化される。経済的調和は、もし社会的に認識された価値が強固になってはじめて保証される。これらの共有する社会的価値についての知識とその充実は、アリストテレスの実際の科学、すなわち政治学の領域内の問題である。その場合、政治的組織はこの過程における中心的な役割を果たしている (*Ibid.*, pp. 127-128)。これが、アリストテレス貨幣論のクレスポによる要約である。

以上、さまざまな視点からアリストテレスの貨幣論に対する評価を紹介した。先に述べたシュンペーターとは違って、いずれの評価も比較的好意的であり、貨幣の起源を中心とするアリストテレスの貨幣論の特質を的確に把握しているように思われる。

お わ り に

貨幣の起源についてはさまざまな考え方があるが、ロー、マルクス、メンガーに代表される物々交換に由来する貨幣自生説（自然発生説）と、アリストテレスを嚆矢とする「申し合わせ」、「合意」、「法制」などに起因する社会契約説（ないし協約説）の2つに大別することができる。アリストテレスは紀元前4世紀に、貨幣の機能として「価値尺度」としての機能を重視しているうえ、貨幣を媒介としない直接的な物々交換が成立する困難、いわゆる「欲求の二重の一致」が成立する困難を指摘する。彼はそうした認識の上に立って、貨幣は共同体社会を構成する人々の「申し合わせ」、「法律」、「慣習」

アリストテレスの貨幣起源説

などに基づく交換の媒介物として人為的に創造されたというのである。

こうした社会的合意を貨幣の起源とみなすアリストテレスの見解は、17世紀の自然法哲学を代表する思想家であるプーフENDORF、18世紀前半に活躍したフランシス・ハチソン、そしてハチソンに師事したアダム・スミスによって受け継がれる。ただし、ソクラテス、プラトン、アリストテレスなどが活躍した古代ギリシャにおける社会的・経済的構造を的確に理解することは、当時の貨幣の概念や貨幣の役割を考察する際にきわめて重要であると思われる。ポラニーは古代ギリシャ・ローマ社会に典型的に見られる人間の経済活動の支配的な統合形態として、「互酬」、「再分配」、「交換」の3つを指摘し、古代ギリシャ社会を互酬的経済が中心の社会として把握する。こうしたポラニーの見解は、その後多くの研究者によって確認され、古典期アテナイを中心とする古代ギリシャ社会にあつては、ポリス内の人々の相互扶助と互酬性によって支えられた社会であるとの考え方が定着する。アリストテレスの社会契約説は、共同体（ポリス）を構成する人々の相互扶助と互酬性によって裏付けられているものであるとすれば、アリストテレスよりはるか後のプーフENDORFやハチソンおよびスミスを社会契約説という同一の範疇に括することは相当に乱暴であると言わねばならない。

アリストテレスは、ほとんどあらゆる学問分野に大きな業績を残して「万学の祖」と称されてきたが、彼の貨幣の起源を中心とする見解一つを取ってみても、2000年以上を経た現在においてすら何ら陳腐ではなく、標準的で妥当な見解の一つであるように思われる。

参 考 文 献

〔 以下に引用した文献については、漢字や平仮名などを含め、必ずしも翻訳には〕
〔 従っていない場合がある。〕

Aristotelēs, *Ethica Nicomachea* (高田三郎訳『ニコマコス倫理学』岩波書店、2010年).

- Aristotelēs, *Magna Moralia* (茂手木元蔵訳『大道德学』(アリストテレス全集第14卷) 岩波書店, 1968).
- Aristotelēs, *Politica* (山本光雄訳『政治学』(アリストテレス全集第15卷) 岩波書店, 1969年).
- Clower, R. W. [1969] "Foundations of Monetary Theory," in Cowar ed. *Monetary Theory*, Penguin Modern Economics Readings.
- Crespo, R. F. [2014] *A Re-Assessment of Aristotle's Economic Thought*, New York, Routledge.
- Finley, M. I. [1954] *The World of Odysseus*, The Viking Press, New York (『オデュッセウスの世界』岩波書店, 1994)
- Finley, M. I. [1970] "Aristotle and Economic Analysis," *Past and Present, A Journal of Historical Studies*, vol. 47, pp. 3-25.
- Gough, J. W. [1957] *The Social Contract*, Oxford, The Clarendon Press, 2nd ed.
- Humphreys, S. C. [1978] *Anthropology and the Greeks*, Routledge & Kegan Paul, London.
- Hutcheson, Francis [1747] *A Short Introduction to Moral Philosophy, Collected Works of Francis Hutcheson*, Facsimile Editions prepared by Bernhard Fabian Volume 4, Georg Olms Verlag, 1990 (田中秀夫・津田耕一訳『ハチソン道德哲学序説』京都大学学術出版会, 2009).
- Hutchison, Francis [1755] *A System of Moral Philosophy, (in Collected Works of Fancis Hutcheson, vol. 5-6*, Hidesheim, 1969).
- Karimzadi, Shahzavar [2013] *Money and its Origins*, London and New York, Routledge,
- Knapp, G. F. [1905] *Staatliche Theorie des Geldes*, 3 Aufl. (宮田喜代蔵訳『貨幣国定学説』岩波書店, 1922年).
- Marx, Karl [1890] *Das Capital*, Erster Band, Diez Verlag (中山 元訳『資本論：経済学批判』第1巻1, 日経BP社, 2011
- Menger, C. [1871] *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre Erster, allgemeiner Theil*, Verlag Wirtschaft und Finanzen, Düsseldorf (安井琢磨・八木紀一郎訳『国民経済学原理』日本経済評論社, 1999年).
- Menger, C. [1923] *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre* (八木紀一郎・中村友太郎・中島芳郎訳『一般理論経済学』みすず書房, 1984年)
- Meikle, Scott [1994] "Aristotle on Money," *Phronesis*, vol. 39, Issue 1, pp. 26-44.
- Millett, Paul [1991] *Lending and Borrowing in Ancient Athens*, Cambridge, Cambridge, Univerity Press.
- Plato, *The Dialogues of Plato*, translated into English with Analyses and Introductions by Benjamin Jowett, Oxford, At the Clarendon Press, 4th editions (藤沢令夫訳『国家』(上), 岩波文庫, 1979年).
- Plato, G. Burnet, *Plato's Opera*, 5 vols., Oxford Cllasical Texts (森進一他訳『法律』(上)(下), 岩波文庫, 1993年).

- Polanyi, Karl [1957] *The Great Transformation—The Political and Economic Origins of Our Time—*, Boston, Beacon Press (吉沢英成他訳『大転換』——市場社会の形成と崩壊——) 東洋経済新報社)。
- Polanyi, Karl, et al. ed., [1957] “Aristotle Discovers the Economy” in *Trade and Market in the Early Empires*, The Free Press, Glencoe (Dalton, G. (ed.)
- Polanyi, Karl [1971] *Primitive, Archaic, and Modern Economies, : Essays of Karl Polanyi*, chap. 5, Boston, Beacon Press reprinted, 玉野井芳郎・平野健一郎訳『経済の文明史』日本経済新聞社, 1975年所収)。
- Polanyi, Karl [1977] *The Livelihood of Man* (玉野井芳郎・栗本慎一郎訳『人間の経済 1——市場社会の虚構性——』岩波書店, 1980年)。玉野井芳郎・中野正訳『人間の経済 2——交易・貨幣および市場の出現——』岩波書店, 1980年)。
- Pufendorf, Samuel [1964] *On the Law of Nature and Nations*, Book V : translated by C. H. and W. A. Oldfather, London.
- Pufendorf, Samuel [1991] *On the Duty of Man and Citizen According to Natural Law*, edited by J. Tully : translated M. Silverthorne, Cambridge, Cambridge University Press.
- Sahlins, M. D. [1965] “On the Sociology of Primitive Exchange” edited by Michael Banton, *The Relevance of Models for Social Anthropology*, Tavistock Publications, London (Sahlins, M. D. [1965]., *Stone Age Economics*, Aldine Publishing, 1972年所収 (山内 昶訳『石器時代の経済学』法政大学出版会, 1984))
- Schumpeter, Joseph A. [1954] *History of Economic Analysis*, New York, Oxford University Press (東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史』(上) 2006年)。
- Scott, W. R. [1900] *Francis Hutcheson, His Life, Teaching and Position in the History of Philosophy* (Reprint of Economic Classics, New York, Kelly 1966)
- Seaford, Richard [1994] *Reciprocity and Ritual: Homer and Tragedy in the Developing City-State*, Oxford, Oxford University Press.
- Smith, Adam. [1789] *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. in three volumes, the fifth edition, London, A. Strahan and T. Cadell (大河内一男監訳『国富論 I』, 『国富論 II』中央公論社)。
- 飯坂良明・田中 浩・藤原保信編著 [1977] 『社会契約説——近代民主主義思想の源流——』新評論。
- 岩井克人 [1993] 『貨幣論』筑摩書房。
- 栗原麻子 [2012] 「古典期アテナイにおける互酬的秩序：課題と展望」 *Journal of History for the Public*, 9, pp. 5-14, Department of Occidental History, Osaka University.
- 恒藤 恭 [1968] 『法思想概説——法哲学の伝統——』日本評論社。
- 古川 顕 [2015] 「ジョン・ローの貨幣理論」『甲南経済学論集』第55巻第3・4号, 211-271ページ。
- 古川 顕 [2016] 「貨幣の起源と物々交換 (1)」『経済論叢』第190巻第1号, 35-55ページ。

古川 顕 [2017] 「貨幣の起源と物々交換 (2)」『経済論叢』第191巻第3号, 1-16ページ。

前田俊文 [2004] 『ブーフエンドルフの政治思想——比較思想史的研究——』成文堂。